

---

# サンタ×サンタ

槇野雅文

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サンタ×サンタ

### 【Nコード】

N3522J

### 【作者名】

槇野雅文

### 【あらすじ】

12月24日。それは何か期待してしまうような、そんなある日のこと。

桜坂高校1年の水本拓と、同じく1年で幼馴染の桜真央はある人物と会うことになる。そこで、サンタの真実を知ることとなる。

\*\*\*\*\*  
サンタはいるのか?! \*\*\*\*\*

ついにその答えが今明らかに!!

\*\*\*\*\* サンタの真相はこの中に込められて

いる

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

## ブローグ

くブローグく

12月24日。

それは何か期待してしまふような、そんなある日のこと。

外はLED発光で赤や黄、青、緑と普段感じることはない、温かみがある。

そして、大きなツリーのでっぺんには決まってきれいな星がついている。

少し薄暗い中でも全く寂しさを感じないどころか、むしろ人々の心を引き付けるものがある。

「サンタさん。今日来てくれるかな。」

「タクがいい子にしてたら、来てくれるわよ。」

「やったー。」

とふと昔のことを思い出していた俺、水本<sup>みずもと</sup> 拓<sup>たく</sup>は高校生になった  
今でも、あのどこか怪しげなサンタを信じている。

というのも自分がサンタであるからだ。

ついこの前の自分ならサンタなんて、宇宙人とか未来人とか超能力者でも会わない限りこれっぽちも信じていなかっただろう。

つまり、昨日ある事件が起こったのだ。

## 第1章 サンタ×サンタ

### 第1章 サンタ×サンタ

12月23日。

それは若い人の中では、イブイブとかいうのであろうが、

彼女のいない自分にとってクリスマスなんて、どうでもいいイベントの一つだった。

高校生にでもなれば、かわいい彼女が1人くらいいてもいいのだが、全くといってもいいほど縁なんてものはない。

しかも、携帯の電話帳なんざ女の子は2人入っているだけだ。

女の子の1人は俺のばあちゃん、3ヶ月前突然シニア携帯が欲しいなんていうから、俺のうちは複雑な理由あって両親は不在だか

ら、俺が着いていつてやるしかなく3時間の格闘後、ばあちゃんは  
ようやく携帯を手に入れた。

そこで仕方なく、赤外線というなんともありがたい機能を使って  
電話番号を交換したわけだ。

ばあちゃんは最後まで見ているだけだったのだが……。

そしてもう1人は、口うるさい幼馴染とか言う奴だ。

名前は桜<sup>さくら</sup> 真央<sup>まお</sup>。

かわいらしい名前はしているが、性格は真反対で運悪く同じクラ  
スだ。しかも家は隣り同士でこれがまた結構面倒だ。

小さい頃から、野球好きで何度鼻にボールを当てられたことか。  
とにかく本当に元気な奴なのだ。

早速、携帯のバイブが鳴るもんだから俺は慌てて携帯を開いた。  
予想通り真央からだっだ。

『明日暇〜。翔も来るからどう？どうせあんた、彼女もないんだから暇よね。6時までには来なさいよ！』とこちらのことは全くお構いなしに書いてあった。

つまり、暇でも、暇じゃなくても来いということなのだろう。

行つてやるさ……。

しかも俺が通う花坂高校のみが、昨日から休みだ。とはいっても、宿題に手をつける元気もなく、こうして夕暮れの肌寒い路地をチャリで飛ばしているのだ。

もつとも、ばあちゃんと2人暮らしな訳で、家から1キロ程の少しさびれたスーパーに買い物をするために向かっているのだ。



これから待ち受けていることに全く気づかずに。

店に着くと、いつも通りおばさん連中が夫の愚痴を漏らしながら、店を出て行った。

俺は店に入る前に、チャリキーをかけるのを忘れていたのに気づきチャリ置き場まで折り返した。

そこで俺は人生初となる目撃をしてしまった！

俺のチャリを盗んで店の裏に隠れるいかにも中年らしき男を見つけてしまったのだ。とにかく道を蹴った。走って店の裏に行くと見ると……。

驚いた、チャリを盗んだのはサンタだったのだ。

確かに俺のチャリは比較的きれいな方だったのかもしれないが、  
サンタが白い大きな袋の中にチャリごと入れているもんだから、俺  
は何もできずにただ啞然とその光景を見ているだけだった。

ようやくサンタは、俺の存在に気づき急にチャリを抱えて逃げ出  
そうとするもんだから、慌てて捕まえた。

「おい、お前サンタの格好なんかして、俺のチャリ盗んだよ。  
」と早口で俺が言っと、

「それはですね。あなたの自転車が必要だったからでして、たく  
さんの。」とサンタの格好をしたおっさんが言いかけたとたんに、  
俺は叫んでいた。

「なんで、サンタの格好してんだよ。」

「つまり私はサンタなのです！」

俺はひっくり返りそうになった。それもまた、真面目な顔で言うもんだから、思わず吹いてしまった。

おそらくよっぽどバカでない限り、こういう状況で、サンタの服を着て私がサンタです。

なんていう奴はなかなかいないだろう。少なくとも、俺が会った中ではこういうたぐいの奴はいなかったはずだ。

真央よりもバカなのかもしれない。

そして、サンタは続けた。

「あなたみたいな一般人にはちよいと話が難かしすぎるかも分かりませんが、サンタが生きる世界には大きく分けて3種類のサンタが存在するのです。

まず1種類目のサンタは、アカアマリン。2種類目はファイアー

ソウル。そして3種類目はレインボーサタンと呼ばれ、種族ごに特徴があるんですよ。

もつとも例外的に、あなたのご両親なんかもサンタに含まれたりもしますが……。

簡単に言えばサンタの世界も食うか食われるかということなんですよ。

私が所属するアクアマリンというのは、とにかく貧乏でしてこうやって盗まなくてはならないことも、度々あるのです。」

「つまり、あんたはそのアクアマリンとかいうところに所属していて、子供達にプレゼントを配るために、こうして俺のチャリを盗んだってわけですかあ。」

「って全然意味わかんねーよ。なんで中年のくせしてサンタやってるんだ？」と俺が尋ねると、

「サンタなんている訳ないって思っていますか？実は私もそうでした。

でもいて欲しいと思ったんですね。当然、サンタは親だと薄々気づいていました。

いつだったでしょうか。

多分小学3年生の頃だったと思います。

友達に親がサンタだって言われたもんですから、最初は驚きましたけど、よく考えてみればサンタなんていないだろうって決め付けていたんですけど、本当にサンタは親なのか確かめたくなりまして……。

私が小3のクリスマスの日、寝るふりをしてずっと起きていたんです。

そして夜の3時ごろだったでしょうが、鍵が掛かっている窓から通り抜けて、サンタが現れたのですよ。

びっくりして、息もできずに、それでも寝るふりをしていました。

そして、サンタはプレゼントの包みをそつと枕元に置くと、急ぐようにしてまた窓を通り抜けて行ってしまったんですよ。

私はあわてて窓を開けて見ましたがもうサンタの姿はありませんでした。

そして、明かりもつけずにプレゼントの小包を開けてみると、ずっと私が欲しかった『ベイゴマ』があっただんですね。

当時貧乏な私にとって、『ベイゴマ』一つも買って貰えませんでしたから、それはそれはうれしくてしょうがなかったんですよ。

朝になって机の上にもう1つプレゼントの包みがあるもんですから、めちやくちゃうれしかったんですよ。

そして学校で友達に言ってやったんです。サンタは本当にいるぞって。友達みんなからバカにされましたね。

あの時は本当に悔しかった。だって本物のサンタを見たんですから……。

ところがですね、翌年サンタは来なかったんです。正確に言えば、母ちゃんしか部屋に入ってこなかったんですよ。

つまりあれですね、貧乏な家の子しかサンタは来ないんですよ。私の家も親父がそこそこ農業で食えるようになり、普通の子並みにはお小遣いも貰ってたんですよ。「と長々と話した。

俺はそれを聞いて、サンタがもしかするといふんじゃないかと思った。しかも、実際目の前にサンタがいるからだ。

じゃあなんで、おっさんはサンタになれたんだろうか？

サンタ、サンタといっているがサンタっていったい何者なんだろうか？

心の中で葛藤を続けていた。

そして思わず口にしていた。「サンタになるには、どうすればいいんだ！」

サンタはこのときを待っていたかのような、そんな鋭い目つきをして、俺にそっと話しかけてきた。



## 第2章 サンタの正体

### 第2章 サンタの正体

「あなたはサンタになりたいんですか？ いや、やめといた方がいいですよ。いろんな意味で……。」  
とサンタは、苦笑いをして言った。

いろんな意味でというのは気になるところだが、サンタになりたいのか？ と聞かれて別になりたくないです、なんていったら別に興味ないですから。と言っているようなものである。俺自身、少し気にもなっていたのだから……。

そして、俺は言った。

「あさってはクリスマスだろ！俺もおっさんの手伝いやってやるよ。」と胸を張っていると、サンタの顔は突然引きつった。そして、サンタはキレた。

「サンタをなめるなよ！お前さんは、万引きや泥棒、時には強盗

だつてしなきゃならんかもしれんのだ。」少し咳き込み、サンタは続けた。

「少し言い過ぎたかもしれないな。それぐらい今サンタの世界は厳しいんですよ。それだけは分かってくれ。実際私も、おまえさんのようなものを盗んだのはこれが2回目なんです。」

もうサンタになって20年目なのですが、今年は大不況でして……。サンタにはノルマというものがあります。ノルマは、子供達のところにはプレゼントを届けたら、届けた分チップとなるんです。」

つまり給料みたいなもんです。チップは子供1人に付き1グランです。ちなみにグランは宇宙共通なのです。」

「ちょっと待て！ということとはだ、サンタは宇宙規模で活動しているのか？」と俺は言った。

「そういうことになりますね。地球以外にも、アンドロメタやオリオン聖、火星なんかにも行きますかね。それぞれの星によってクリスマスの時期は異なります。」

さっきの話の続きで、ちなみに1グランはドルにして1ドル、日本円にして100円といったところでしょうか。もう一度聞きますが、

『あなたは、サンタになりたいんですか。』

そして、俺は即答した。

「ああ、その得体の知れねえ、サンタとやらになってやるよ！それと早くチャリを返せ。」

「ダメですよ。これはある子供のプレゼントなんですから。」

「何でだよ！って乗って逃げるな」

「元々鍵を掛けないのが、悪いんですよ。」

そして、これから始まろうとしていることにまだ気づきもしない  
水本拓であつた……。

### 第3章 サンタの本当の正体<前編>

#### 第3章 サンタの本当の正体<前編>

よく晴れた天気、ある12月24日のこと。

きらきらと眩しい太陽と小鳥のさえずりで目覚めた俺は、目覚まし時計がびったり12に短針と長針がびったり合わさっていることに気が付いた。

それは、12時を示しているのであり、遅刻という2文字も示しているのだった。

昨日のサンタとびったり12時にスーパーの裏の場所、つまりサンタがいることを思い知らされたところで、待ち合わせをしてるのだ。

俺は服を着替えて、前髪を水で濡らしながら歯を磨き、ドライヤーで乾かすと、食パンをくわえて、ようやくチャリに乗ることがで

きた。そして、全速力で飛ばした。

まあ、そんなに焦ることも無かったんだが……。

店のチャリ置き場に、何とか返して貰ったチャリを止めて、次は絶対に取られないようにしっかりと鍵を閉めた。

腕時計をみると15分overといったところだろうか。我ながら、朝起きてから15分で到着できたことに感謝したい。チャリキ―を振り回して、店の裏に行く……。

俺はまたもやその光景に啞然としてしまった。

それはサンタが白い大きな袋の中にチャリごと入れている時とまるで比にならないぐらいのことが起きていた。

そこには、サンタの格好した奴と女子高生がいたのだ。

それも隣の家で、幼馴染の真央だった。

まったくこの原理というものが、いまだに分からないが、何を思  
って真央までいるのだろう。こんなひっそりとしたところに、サン  
タの格好した奴と女子高校生が2人だけぽつんといれば誰だって驚  
くだろう。そうじゃなくて何で真央がいるんだ。

ということは、真央もサンタの手伝いとも言つつもりなんだろ  
うか。その時、真央は俺に気がついたのか眼を点にして言った。

「頼もしい助っ人ってあんただったの！」その声はどことなく響  
き渡った。

でも驚いたもんだ。真央が堂々とサンタと話していたのだから。

てつきり、サンタの正体を知ってしまったのは自分だけだと思い  
込んでいた……。

そして、真央の近くまで寄ると俺は口を開いた。

「おまえもサンタの助っ人か？」

真央は不安そうな顔でつぶやいた。

「そうよ……。」

そこでようやくサンタは俺と真央が知り合いであることを理解したのか、相づちまで打った。

「友達ですか？」

「そういつとこかしら……。」



サンタは、はっとした顔をしてもう一度相づちを打った。  
「そういえば、お二人さんの自己紹介を。」

真央はサンタの方に向いた。

「私の名前は桜真央。まあ、真央でいいわ。で、ちなみにこの目の前にいるスケベで頼もしい助っ人さんが、私の幼馴染の水本拓よ。」

何か得意げな表情で真央は胸を張っていた。こういう時の彼女の目はどこか輝いていた。

本当にしみじみと感心してしまう。

このでしゃばりなところに……。

#### 第4章 サンタの本当の正体<中編>

空は雲ひとつなく、青空が空一面に広がっている。

しかし、外の空気は身にしみるような寒さだ。

真央は、パーカーの上にダウンジャケットを着て、それでも寒そうに手を震わせながらサンタの話に耳を傾けていた。

サンタは今日の一連の仕事を話終わると、つかつかとチャリ置き場の方向に行ってしまった。そして、真央は俺の顔を覗きこんだ。

「拓。あんたはいつから、サンタの助っ人始めたのよ？」

「昨日だよ。」

真央は急に立ち上がって、腕組みをした。

「そ〜なんだ。じゃあ私の後輩ってことね。」

「言ってる意味がわからないんだが……。」

得意気な顔で、真央は口走った。

「簡単に言えば、あたしの方が先に助っ人になったってことでしょ。」

「お前はいつからだよ?!」

「2日前……」

「……、ってまあ!たった1日だけで偉そつに言っな。」

「まあ、後々身に染みるように分かるわよ。」と真央が言い終えると同時に、サンタがココアを3本抱えて1本ずつ俺たちに渡した。

「じゃあ、よろしく頼むな。」

そう言い終えると、サンタはココアを一気に飲み干して、白い吐息を吐いて俺達にカイロを渡した。

半信半疑で見ていると、ボタンが3つ付いていた。そして、上から1、2、3とある。

「このカイロは何なんだ。」  
と俺が尋ねると、サンタは言った。

「このカイロは、3つ性能があります。上から1、2、3とボタンがあるのが分かると思いますが、1を押すと私達と無線で会話ができます。2を押すと透明になり、浮くことができます。」

3は本当に何かあった時だけ押してください。3を押せるのは力  
イロ1つにつき1回だけです……。」

「なんで、3は1回しか押せないのよ。」

サンタは、深刻な顔つきと鋭い目のまま黙り込んでしまった。

しばらくして重い口を開いた。

「とにかく、本当に何かあった時だけにしてください……。それ  
では、サンタの世界に行きましようか。」

そう言い残すと店の裏へと歩き始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3522j/>

---

サンタ×サンタ

2010年10月10日06時49分発行